



小田原男声合唱团

第44回定期演奏会

— 第62回 小田原市民文化祭参加 —



2015.12.5 (土) 午後1:15 開場 午後2:00 開演
小田原市民会館大ホ一ル

主催 小田原男声合唱团
後援 小田原市教育委員会
日本男声合唱協会 (JAMCA)
神奈川県男声合唱協会 (KAMCA)
湘南合唱連盟
小田原地区合唱連盟
小田原音楽連盟



＜ 第43回 定期演奏会 ワンステージメンバーと共に ＞ から

ごあいさつ



小田原男声合唱団
団長 斎藤 恵司

本日はお忙しい中を第44回定期演奏会にお越しいただき、本当にありがとうございます。

今回のプログラムでは、「水のいのち」「月光とピエロ」という名曲中の名曲をそろえました。

「水のいのち」は合唱を嗜む方にとっては、男声合唱とは限らず女声合唱や混声合唱で大変なじみのある曲だと思えます。また、「月光とピエロ」は男声合唱を経験した方にとっては、何度も歌ったことがあり、ほとんどの方が楽譜を見なくても歌える曲ではないでしょうか。

このように名曲を2つ並べた今年は、一昨年から続けてきた『1ステージメンバー』で歌うステージを2ステージに拡げてメンバーを募りました。その結果、これまででは最高の20名の皆様方の参加を得ることができました。しかも2つのステージで歌うメンバーも半数近くいます。今回のように応募メンバーが増えたことには、不朽の名曲が持つ魅力は勿論ですが、やはり指揮者の先生の魅力も大きな要素ではないでしょうか。

「水のいのち」を振っていただく辻秀幸先生には、昨年が続いての客演指揮をお願いしました。辻先生は「水のいのち」の作曲者・高田三郎先生とは、辻先生のお父様(正行先生)を通しての親交があり、作曲者の意図や想いを充分に理解されています。今回の練習の中でも敬虔なクリスチャンであった高田先生の信仰心と結びつく曲の解釈をご指導していただきました。辻先生の思いを皆さんにお伝えする演奏ができればと思います。

また、「月光とピエロ」を振っていただく外山浩爾先生は、男声合唱を50余年にわたり指導をなさってこられた大御所です。男声合唱を知りつくした先生の解釈による男声合唱の名曲「月光とピエロ」をお楽しみください。

さて、今年は戦後70年という節目の年でもあります。この70年という年数が実は小田男とも深く関係しています。現在の小田男メンバーの平均年齢はほぼ70歳に迫ろうとしています。つまり終戦からの日本の歩みがメンバーの歩みと重なるのです。しかし、数字のマジックとはよく言われたものです。実際には終戦以前に生まれたメンバーのほうが戦後生まれよりかなり多のです。小田男メンバーの高齢化は避けては通れない課題です。「若手メンバーを増やしたい」「今いるメンバーがいつまでも歌い続けるようにしたい」こんな思いを持ちながらの団の活動です。悩みや課題も多々ありますが、いつまでも若々しい声と音楽へのロマンを大切にし、男声合唱の楽しみを追究しながら、これからも歌い続けてゆければと思います。

最後になりましたが、今年もこのように定期演奏会を開催できますことは、私たちを温かく支え、応援してくださる多くの方々のお陰と感謝しています。心からお礼を申し上げます。それでは、本日の演奏会を存分にお楽しみいただければ幸いです。

§ プログラム

I 男声合唱組曲「水のいのち」 高野喜久雄 作詩 高田三郎 作曲 指 揮 辻 秀幸
ピアノノ 中根 希子

～ ワンステージ メンバー と共に ～

- 1 雨
- 2 水たまり
- 3 川
- 4 海
- 5 海よ

II 愛唱歌 より

～ 日本民謡、牛丸絃一 編曲集から ～

- 1 最上川舟唄 山形民謡 清水 脩 作曲
- 2 斎太郎節 宮城県民謡 竹花秀昭 編曲
- 3 大島節 伊豆大島民謡 福永陽一郎 編曲
- 4 旅立ちの日に pf 小嶋 登 作詩 坂本浩美 作曲 牛丸絃一 編曲
- 5 贈る言葉 pf 武田鉄矢 作詩 千葉正臣 作曲 牛丸絃一 編曲

休 憩

III 会場の皆さんも一緒に

バリトン 杉山範雄

- 1 かやの木の山の pf 北原白秋 作詩 山田耕筰 作曲
- 2 三好達治の詩による二つの歌 から
乳母車 pf 三好達治 作詩 木下牧子 作曲

指 揮 杉山範雄

- 3 からたちの花 北原白秋 作詩 山田耕筰 作曲 林 雄一郎 編曲
- 全員合唱 指 揮 杉山範雄
- 4 この道 北原白秋 作詩 山田耕筰 作曲 福永陽一郎 編曲

バリトン 指 揮 杉山 範雄
ピアノノ 中根 希子

IV 男声合唱組曲「月光とピエロ」 堀口大學 作詩 清水 脩 作曲 指 揮 外山 浩爾
～ ワンステージ メンバー と共に ～

- 1 月夜
- 2 秋のピエロ
- 3 ピエロ
- 4 ピエロの嘆き
- 5 月光とピエロとピエレットの唐草模様

男声合唱組曲「水のいのち」

「水のいのち」は1964(S39)年度芸術祭参加作品としてTBSの委嘱によって作曲され、同年11月10日、指揮・山田和男、合唱・日本合唱協会により放送初演された。男声編曲版は1972年、クローバー・クラブ(同志社グリーククラブOB合唱団)の要請により行われた。

以来、混声版、女声版、男声版合わせて数百刷を突破し、50年を越えた現在でも、数多くの合唱団で歌われ続けている。そして、日本の合唱楽譜の売上げ上位を続けている。

高野喜久雄 (1927-2006)

新潟県佐渡に生まれる。20歳頃から超現実主義に傾倒し、北園克衛の雑誌「VOU」に参加するが、翌年に自作全部を破棄、ハイデガーを耽読したと言われ、その作風は「宇宙における生と生存を問いつけ、存在論的であるが実存主義的ではない」と評される。讃美歌や典礼聖歌の作詩も手がけ、高田三郎により作曲されたものも多い。喜久雄は『水は川から海へ、そしてまた空へと帰る。水の旅は人間の内部のドラマに似ている』と語っている。

1. 雨

天からの雨は、分け隔てなく地上の全てものや私たちが全ての人々を受け容れ恵みをもたらす。そして全てのものに、優しく「いのち」を与えてゆく。

2. 水たまり

やがては消え失せてしまう、小さな水たまり。しかし、それは一途に空を映し、空の澄みに憧れる。

3. 川

「何故さかのばれないか」。それは、自分が何者であるかという、激しい疑問の表出である。しかし、その疑問に怒り苦しみながらも、下へと流れてゆくほかは、空にこがれるほかはないのである。

愛唱歌 より

2010版愛唱歌集は2004版をベースにし、多田武彦先生委嘱作品、信長貴富先生編曲委嘱作品等に加え、主にアカペラ曲を集めて編集しました。28曲、いずれも慣れ親しんで来た曲でもあり、小田男にとっても永く歌い継がれて行く曲です。その中から「日本民謡」名曲3曲を選定しました。

1. 最上川舟唄

1936年9月NHK 仙台局の「最上川を下る」という番組企画により、左沢(あてらざわ)の詩人渡辺国俊と同地の民謡家後藤岩太郎とで作られた。柴橋村中郷の船頭から教わった掛け声と左沢の船頭の母親が覚えていた「松前くずし」という船頭仲間のはやり歌を組み合わせた曲としてまとめられたもの。清水脩の男声合唱の民謡中、最高の傑作。

2. 齋太郎節

宮城県の松島湾一帯で歌われていた鯉魚のための「ろ漕ぎ歌」。「大漁歌い込み」の名で全国に知られた。昭和40年頃、東北学院大学グリーが演奏旅行の際に、地元の民謡をレパートリーにと当時学指揮の竹花秀昭が男声合唱曲に編曲。やがて全国の男声合唱団に広く歌われる愛唱歌となった。

3. 大島節

伊豆大島民謡。島民たちが茶摘み、茶もみの労作歌として歌っていた『野増節』。明治以後に輸出の花形品として茶葉が横浜野毛に集荷されるよう

主題について 高田三郎は著書『来し方 回想の記』(音友)の中で、『この「水のいのち」を楽譜の配列から「水の一生」と考える人が多いようである。英訳すれば“The Soul of Water”と語っている。“Soul”「魂」とは「それがあれば生きていけるが、それを失えば死んでしまうもの」なのである。水の「魂」とは、低い方へ流れていく性質のことではなくて、反対に「水たまり」は「空を映そうとし」、「川」は「空にこがれるいのち」なのであって、「水のいのち」は、私たちの「いのち」でもあり、この組曲の主題でもあるのだ』と語っている。

高田三郎 (1913-2000)

名古屋市に生まれる。現東京藝術大学作曲科卒業、国立音楽大学教授、日本現代音楽協会委員長等を歴任。1978年紫綬褒章受章、1992年ローマ法王より聖シルベストロ騎士団長章受章。初期は室内楽曲、独唱曲を中心に多くの作品を発表した。合唱曲は「わたしの願い」「心の四季」「橋上の人」「ひたすらな道」「内なる遠さ」「この地上」等がある。自作を中心に指揮者としても活躍。熱心なクリスチヤンとしても知られ、教会からの委嘱を受け、日本語による「典礼聖歌集」の作曲を行い、広く全国で歌われている。

4. 海

旅を終えて疲れ果て、母なる海に抱かれる水と同じように、人も疲れ果てれば、海の中の一人の母に抱かれ、安らぎを得る。冒頭と最後のピアノは波の音であり、「見なさい、これを見なさい」と問い続ける。

5. 海よ

くらげ、ひとで、真珠を抱くこや貝、降りしきる白い雪(マリンスノー;ブランクトン)、全てを受け容れる海では、無限に波の寄せ返しが繰り返される。その自然の営みは、はるか億年の昔から変わることはない。その旅を終えた水はやがて空の高みへの始まりの海から、「水のいのち」は天へと昇って行く。

20年に渡る活動、さらには2005年からは団内指揮者とし団を牽引された牛丸紘一氏編曲による「旅立ちの歌」、卒業式で歌われている曲を中心に2012年ステージを構成しました。近年のオリコンのランキングでも上位の2曲を選びました。60歳代以上の世代では「蛍の光」「仰げば尊し」が定番でしたが ……。

になり、火入れ加工する作業の中で野毛近辺で歌われていた『お茶場節』が取り入れられ、現在の美しいメロディーになったと言われている。

4. 旅立ちの日

1991年、秩父市立影森中学校の小嶋登校長が「世界に一つしかない曲を生徒に贈りたい」と作詞し、音楽担当の坂本浩美教諭が作曲。後に小中学校の教科書に収載され、全国の「卒業式」でも取り上げられ、拡がることとなった。多くの歌手がカバーしており、中でも2007年SMAPがCMで歌い、人気に拍車をかけた。この曲にこがれ、音楽之友社に特別の許諾を得た牛丸紘一氏が男声四部合唱に編曲したものです。

5. 贈る言葉

1979年から始まった「金八先生」のドラマの中で海援隊が歌い一世を風靡した。翌1980年3月から各地の卒業式で歌われ始めました。それ以降、「旅立ちの日」と共に、今日、卒業式ソングランキングとしても常に上位を占めています。

会場の皆さんもご一緒に

温暖な気候と豊かな自然に恵まれた小田原は、交通の利便性も高く、明治の頃から多くの政財界重鎮や文学者が訪れ居住しました。北原白秋もその一人で、大正7年3月、33歳の時のことでした。大正15年5月まで長く初めて自宅を持つた地であり、生涯に約1200篇に及ぶ童謡作品のうち、およそ半数の作品を小田原時代に創作しています。例えば「赤い鳥小鳥」「あわて床屋」「ちんちん千鳥」「揺籠のうた」「砂山」「からたちの花」「かやの木の山」「ペチカ」「待ちぼうけ」「この道」などが上げられます。今年には北原白秋(1885-1942年)生誕130年の年。小田原で2人の子供に恵まれ、人生で最も幸せな時期を過ごし終生小田原暮らしも考えましたが、関東大震災で住居が半壊し、やむなく東京へ移住しました。北原白秋作詩 山田耕筰作曲「かやの木の山」の三好達治作詩 木下牧子作曲「乳母車」を杉山先生の独唱、そして、北原白秋作詩 山田耕筰作曲「からたちの花」「この道」と、小田原にも因んだステージ構成です。

1. かやの木の山の

秋の夜を舞台としたユーモアをたたえた子守歌です。小さなかやの実につられて、幼子の空想は遠い山里へと誘われます。いろりの音、かやの実がはぜる音、鳴りやまない雨音、小さく鳴くお猿に囲まれながら、幼子はやがてやさらかな眠りにつくのでしょうか。白秋は34歳の頃、[伝肇寺(でんじょう)]の境内に「みみづくの家」という庵を建てました。伝肇寺の境内には、大きなかやの木があり、それを眺めて童謡「かやの木の山」を創作しました。かやの木の下の小さな建物には、白秋名付けの「かやの木地蔵」が納められています。

2. 乳母車

大阪市中之島公園内の図書館の近くに三好達治の文学碑があります。そこに詩壇デビュー作「乳母車」が刻まれています。この詩は4連からなり、1・4連は現在、2・3連は過去を表し、永遠の郷愁と母への慕情が歌われています。

男声合唱曲「月光とピエロ」

堀口大学 1892年、東京都本郷区森川町一番地に出生。父が当時、東京帝国大学法科学生で家が赤門前であったことに因み「大學」と命名された。1910年(M43)新詩社同門の佐藤春夫と共に慶応大学文学部予科に入學。翌年メキシコ公使の父に従い、慶大を中退し日本を離れることとなった。その短い學中に永井荷風の始めた『三田文学』に詩歌を発表。その縁により『月光とピエロ』の出版の際には荷風に序文を依頼した。大学では佐藤春夫と親交、与謝野鉄幹・晶子のグループに加わり万葉集、和泉式部、源氏物語等を読み、特に王朝文学の影響を大きく受けた。外交官の父に伴い9年間に欧米で過ごした。遠きブラジルの地にありながら、第1詩集『月光とピエロ』を自費出版で日本文壇に問うたのは、弱冠27歳、1919年大正8年、青春のただ中であつた。

1. 月夜

月夜を一人寂しくたたえずむピエロ。愛するコロンの姿は最早ない。いつも滑稽な所作で人々の笑いを誘うピエロが、独りぼちになつて、ひしひしと感じる孤独感。待てども待てども愛するコロンのピエロは現れない。「あまりにことのかなしき」に涙し、さいなまれる姿が浮かび上がる。

2. 秋のピエロ

悲しく、孤独であつてもピエロを演じなければならぬ。生活のためと分かつていながら、常にやりきれない気持ち、「O(オー)の形の口を」とはその心からの叫びに他ならない。秋という季節はその無常感を深くし、さいなまれる心からの涙。

3. からたちの花

詩が書かれたのは、白秋が39歳の時の1924年5月、小田原に住んでいた頃のこと。水之尾道は白秋が愛した散歩道で伊豆半島も望める美しい小道。既に名をなした詩人は、そこで「からたちの花」と再会し、望郷の念に駆られている。1年後輩で38歳になつた耕筰は白秋の詩に強く感銘を受け、30分足らずで作曲したと言われ、1925年1月、東京中野に住んでいた時のことでした。(今年は耕筰没後50年です)

4. この道

白秋はこの作品を「尋六ノ巻」(六年生用)に収め、「北海道風景です。主人公は男の子です。」という注を施したそうです。1925年にサハリンと北海道へひと月の旅行をしており、途次に見た事物を作品化、童謡も数十篇作り上げています。北海道のロマンと夢に満ちた広大な風土を舞台に、様々な風物を媒介としながら回想の世界へと入る構成は巧みであり、数ある耕筰の曲の中でも最も歌われている曲の一つです。

清水脩 「月光とピエロ」は男声合唱曲の原点で代表作である。1949年、自身の指揮で東京男声合唱団により初演。長く人気を保ち続けている名曲である。1948年の合唱コンクール課題曲として先に「秋のピエロ」が入選した時、清水脩は未だ新進作曲家であり、声価の定まった作曲家への委嘱ではなかつた。楽譜コーナーナーでは男声は勿論のこと、混声、女声合唱組曲の6文字が今では当たり前のように並んでいれるが、『合唱組曲』という形式は清水脩が「月光とピエロ」で初めて使った手法である。今日では組曲が一般的な形となり、合唱曲の原点となつた。

ピエロとは、本来イタリア古典演劇に登場する下男のこと。コロンピエロに恋するものの、いつも振られ役を演じる舞台上のピエロに託し、恋や孤独の哀しみ、それでもなお人生という舞台で生き続けている喜びを表しているのではないであらうか。

3. ピエロ

白粉で真っ白な顔は、月の光に照らされて一見明るく見えるが、その下にある本当の素顔は、儂くなんと辛く寂しげな顔をしていることだろうか。

4. ピエロの嘆き

どこまでも悲しさを背負って生きていくピエロ。月をやよめめに例え、似た者のピエロを月の私生児に見立て、母たる天の月からも一人離れ、舞台の上で泣き笑いして世を過ごしている悲しさ。

5. 月光とピエロとピエレットの唐草模様

舞台照明の月光の下、ピエロとピエレット(女道化師)は表面では明るく心に涙して絡みあうように踊っている。歌い踊り続けることが生への証しかのように。

平成27年度(2015年)事業計画、主な事業等

(1)	2015.	1.	6	(火)	歌いはじめ	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(2)		1.	24	(土)	第22回 JAMCA 日本男声合唱協会 演奏会 じゃむが関西 リハ	伊丹市立文化会館	伊丹市立文化会館・いたみみH
(3)		1.	25	(日)	第22回 JAMCA 日本男声合唱協会 演奏会 じゃむが関西 ゲネプロ・演奏会	伊丹市立文化会館	伊丹市立文化会館・いたみみH
(4)		2.	7	(土)	平成26年度 総会	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(5)		2.	21	(土)	第1回 KAMCA 神奈川男声合唱協会 交流演奏会	ハーモニーH座間	ハーモニーH座間
(6)		3.	14	(土)	みんぼで歌おう! 祇による モーツァルト・ワグネル ゲネプロ (協力)	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(7)		3.	15	(日)	みんぼで歌おう! 祇による モーツァルト・ワグネル ゲネプロ (協力)	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(8)		7.	19	(日)	第64回 湘南合唱祭	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(9)		9.	26	(土)	強化練習(合宿)泊 9:30 ~ 17:30	いこいの村あしがら	いこいの村あしがら
(10)		9.	27	(日)	強化練習(合宿) 8:30 ~ 16:50	いこいの村あしがら	いこいの村あしがら
(11)		10.	18	(日)	第49回 小田原市民合唱祭	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(12)		12.	1	(火)	定期演奏会 リハ1 18:30 ~	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(13)		12.	4	(金)	定期演奏会 リハ2 18:00 ~	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(1)		12.	5	(土)	第44回 定期演奏会	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(2)		12.	22	(火)	歌いおさめ	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(3)	2016.	1.	12	(火)	歌いはじめ	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(4)		2.	6	(土)	平成27年度 総会	旭丘高校音楽室	旭丘高校音楽室
(5)		3.	13	(日)	みんぼで歌おう! 祇による 演奏会(協力)	小田原市民会館	小田原市民会館 大H
(6)		4.	23	(土)	第12回 KAMCA 神奈川男声合唱協会 演奏会	鎌倉芸術館	鎌倉芸術館 大H

第45回 記念定期演奏会 - 第63回 小田原市民文化祭参加 -

12月3日(土) 開場13:15 開演14:00 小田原市民会館 大ホール

随時 募集 !! いっしょに歌いましょう !!

年齢 高校生~80歳代と、幅広い年齢層です。

性別 男性で、歌好きであれば、どなたでも歓迎です。お気軽にお越しください。復団された方もたくさんおられます。勿論、初めての方でも大丈夫です。練習用・パート別音取りCD等を用意します。

すまい 隔年の日本男声合唱協会、神奈川男声合唱協会の演奏会では、400余名による合同曲も演奏できます。

練習日 小田原・湯河原・伊東・南足柄・二宮・茅ヶ崎・藤沢・鎌倉・横浜

大井・中井・秦野・伊勢原・厚木・千葉・岡山県赤磐市 と広範囲です。

毎週火曜日 18:30~20:50、月末の日曜日13:00~16:45

連絡先 小田原 旭丘高等学校 (小田駅より城方皿、徒歩7分)

鈴木壽久 TEL 0465(73)8328 河田一男 TEL 0557(47)3274

ワンステージ メンバー 募集 《2016年12月3日(土) 予定の 第45回 記念定期演奏会で、一緒に歌いましょう !!》

年齢 高校生~80歳代と、年齢制限はありません。

性別 男性で歌好きであれば、どなたでも歓迎です。ワンステージと一緒に歌いましょう!

初めの方でも大丈夫です。練習用・パート別音取りCD等を用意します。

練習日 火曜日 18:30~20:50 小田原 旭丘高等学校 音楽室 (小田駅より城方皿、徒歩7分)。

4月より、月1~2回平均 15回程度を予定 (練習日等の詳細は下記連絡先まで)

練習日程等 詳細は3月からご案内します。問い合わせ先 ☎ 杉本 0465-73-0037 青野 0463-87-2473

参加費用 検討中(月会費はなし)。楽譜代は実費です。募集は1月より受けつけます。

ステージ衣装は黒のスーツ (シングルorダブル)です。ご安心を。 曲目 男声合唱細曲 (邦人作品を予定 1月に確定)

委嘱曲 への歩み

2001年	第30回記念 定期演奏会 委嘱曲	再演 (JAMCA 石川銀)	大木 惇夫	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱細曲「西湘の風雅」					
2006年	第35回記念 定期演奏会 委嘱曲	初演 (JAMCA 大分にて)	北原 白秋	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱細曲「沓寒小景(ごんせいのけい)」		信長 貴富	編曲		
	男声合唱のための 宮崎 駿 さんぽ	初演	中川 李枝子	作詞	久石 譲	作曲
	さんぽ	初演	覚 和歌子	作詞	木村 弓	作曲
	さんぽも何度でも	初演	中川 李枝子	作詞	久石 譲	作曲
	さんぽ~finale~					
2008年	第37回 定期演奏会 委嘱曲	初演 (JAMCA 讃にて)	大木 惇夫	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱細曲「大木惇夫の詩から 四季點綴(しまてい)」		信長 貴富	編曲		
	5つのオアハケーニヤによる憧憬 編曲委嘱	初演				
2009年	第38回 定期演奏会 委嘱曲	初演	信長 貴富	編曲		
	男声合唱とピアノのための「赤い鳥小鳥」-北原白秋謹識-					
2011年	第40回 記念定期演奏会 委嘱曲	初演 (JAMCA 札幌にて)	三好 達治	作詩	丸山 薫	作曲
	男声合唱とピアノのための「わが詩友」		三好 達治	作詩	多田 武彦	作曲
	男声合唱細曲「達治の旅情」					

Members 2015

小田原男声合唱団

T1	伊藤 正昭 (横浜市)	T2	青野 幸夫 (秦野市)	B1	上利 宏司 (小田原市)	B2	赤川 軍一 (伊勢原市)
加藤 重喜 (秦野市)	鬼澤 正純 (藤沢市)	鬼澤 精孝 (二宮町)	正純 精孝 (藤沢市)	熱田 隆純 (南足柄市)	一色 義信 (秦野市)	磯田 幸男 (小田原市)	義信 幸男 (小田原市)
加藤 兀一男 (伊東市)	佐藤 健二 (南足柄市)	健二 昇次 (小田原市)	健二 昇次 (小田原市)	網盛 伊東 (秦野市)	井上 忠彦 (小田原市)	井上 忠彦 (小田原市)	忠彦 忠彦 (小田原市)
河田 惠司 (伊勢原市)	杉本 高瀬 (二宮町)	昇次 隆 (二宮町)	昇次 隆 (二宮町)	伊東 岩越 (小田原市)	笠原 敏雄 (大井町)	笠原 敏雄 (大井町)	敏雄 敏雄 (大井町)
斎藤 惠 (剛県 緑市)*	福井 勉 (秦野市)	隆 勉 (秦野市)	隆 勉 (秦野市)	岩越 江川 (鎌倉市)	古林源次郎 (二宮町)	古林源次郎 (二宮町)	源次郎 源次郎 (二宮町)
佐野 修 (小田原市)	山中 允彦 (茅ヶ崎市)	勉 允彦 (茅ヶ崎市)	勉 允彦 (茅ヶ崎市)	江川 大塚 (小田原市)	坂口 宗夫 (小田原市)	坂口 宗夫 (小田原市)	宗夫 宗夫 (小田原市)
福嶋 哲夫 (小田原市)	山本 洋之 (小田原市)	允彦 洋之 (小田原市)	允彦 洋之 (小田原市)	大塚 岡部仁之助 (秦野市)	佐々木秀昭 (秦野市)	佐々木秀昭 (秦野市)	秀昭 秀昭 (秦野市)
堀内 高嶺 (秦野市)	吉本 隆一 (小田原市)	洋之 隆一 (小田原市)	洋之 隆一 (小田原市)	岡部仁之助 小澤 一 (小田原市)	鈴木 壽久 (南足柄市)	鈴木 壽久 (南足柄市)	壽久 壽久 (南足柄市)
水城 団友*		隆一	隆一	小澤 和信 (小田原市)	田島 達也 (南足柄市)	田島 達也 (南足柄市)	達也 達也 (南足柄市)

ワンステージメンバー

T1	大竹 幸二 (秦野市)◆*	T2	関野 文男 (南足柄市)◆**	B1	青野 正純 (小田原市)◆	B2	齊藤 健治 (川崎市)★
高桑 邦安 (横須賀市)◆	坂口 新治 (南足柄市)◆**	坂口 康史 (茅ヶ崎市)★	新治 康史 (茅ヶ崎市)★	安藤 善克 (伊勢原市)◆**	千葉陽一郎 (海老名市)◆**	千葉陽一郎 (海老名市)◆**	陽一郎 陽一郎 (海老名市)◆**
露木 聰 (小田原市)★	山本 康史 (茅ヶ崎市)★		康史	小松 小松原正道 (伊東市)◆	中間 了吾 (海老名市)★	中間 了吾 (海老名市)★	了吾 了吾 (海老名市)★
久富 有道 (横浜市)◆*				小松原正道 (伊東市)◆	中村 公一 (愛川町)◆*	中村 公一 (愛川町)◆*	公一 公一 (愛川町)◆*
箕輪 吉博 (平塚市)★				小西 正文 (茅ヶ崎市)◆**	村田 雅之 (横浜市)◆*	村田 雅之 (横浜市)◆*	雅之 雅之 (横浜市)◆*
渡辺 功 (茅ヶ崎市)◆**				桃原 正広 (横浜市)★			

◆木のいち ★月光ビエロ

音楽監督

常任指揮者 外山 浩爾

客演指揮者 辻 秀幸

指揮者 ヴォイストレーナー 杉山 範雄

トレーナー

村田 雅之

ピアノ

中根 希子

運営スタッフ

団 長 齋藤 恵司
副 団 長 鈴木 壽久
団内指揮者 小澤 一
事務局 長 杉本 健二
技術部 長 小澤 一
財政部 長 笠原 紘
団員部 長 河田 一男
事業部 長 鈴木 壽久
渉外部 長 大塚 常昭
情報部 長 上利 宏司

財政監査

水城 高嶺
高橋 茂樹

演奏会スタッフ

委員長 杉本 健二
会 計 笠原 紘
演 出 廣瀬 友二
舞 台 各 技術部
録 音 桃井 真也
録 音 坂口 宗夫
写 真 加藤 重喜
渉 外 上利 宏司
打上げ 加藤 重喜
チアジプロ 大塚 常昭
アガンス 河田 一男
譜捲り 杉本 健二
受付 石崎 雅美
市レセプション 柏木 晶子
市レセプション 渡声合唱団 小田原木曜会

事務局 主事 井上 忠彦

箱根の山は 天下の険(けん) 物なかず
函谷関(かん)に 千仞(せん)の谷
万丈(ばん)の山 後(しり)に支(さ)う
雲は山をめぐり 霧は谷をとざす
昼猶(あ)閑(くら)き 杉の並木
羊腸(やうぢやう)の小径(しょうけい)は 苔滑(たゐ)か
一夫関(いつふかん)に当たるや 万夫(ばんぶ)も開くなし
天下に旅する 剛毅(ごうぎ)がけ
大刀腰に 足駄(あだ)がけ
八里の岩根 踏み鳴らす
斯くこそありしか 往時の武士(むしのぶ)

後(しり)に～ 前には山がそびえ 後るは谷により塞がれている
羊腸(やうぢやう)の～ 羊の腸のように 長くねとねと曲がり続く道

箱根の山は 天下の阻
蜀(しやく)の棧道(せんどう) 数ならず
万丈(ばん)の山 千仞(せん)の谷
前に聳(そび)え 後(しり)に支(さ)う
雲は山をめぐり 霧は谷をとざす
昼猶(あ)閑(くら)き 杉の並木
羊腸(やうぢやう)の小径(しょうけい)は 苔滑(たゐ)か
一夫関(いつふかん)に当たるや 万夫(ばんぶ)も開くなし
山脚(さんかく)に 草鞋(わらじ)がけ
獵銃(りやくじゆう)に 踏み破る
八里の岩根 踏み破る
斯くこそありけれ 近時の壯士(むし)

一夫関(いつふかん)に～ 一兵卒(ひやくしゆう)が守って 万の敵が攻めて来ても開けられない
蜀(しやく)の～ 断崖絶壁に作られた柵(さく)のような道は一人(ひとり)がやつの険道

男声合唱組曲 水のいのち

作詩：高野喜久雄
作曲：高田三郎

1 雨

降りときれ 雨よ
降りしときれ 雨よ
すべすくむものの上に
またすくむものの上に
横たわるものの上に
降りときれ 雨よ
降りしときれ 雨よ
すべすくむものの上に
またすくむものの上に
許(ゆる)したあぬものの上に
許(ゆる)したあぬものの上に

降りしときれ 雨よ
わけへたてなく
潤(うる)れた井戸
踏(ふ)まれた芝生(しば)生(せい)
こと切(き)れた梢(せう)
なお ふみ耐える根に

降りしときれ 立ちかえらせよ
井戸を井戸に
庭を庭に
木立を木立に
土を土に

おお すべてを
そのものに
そのものにて

3 川

何故 低いかのぼれないか
何故 さかのぼれないか

よどむ淵(ふち) くるめく渦(うず)のいらだち
まこと 川は山にこがれ
きりたつ峰(たかね)にこがれるいのち
空の高みにこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり
空にこがれて 魚をみごもり
さからう石は 山の形
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か
川は何かと問うことを止めよ
わたしたちもまた
同じ石を 同じ魚を みごもるもの
川のがれ ことがれ 生きるもの

2 水たまり

わたちの くぼみ
そこの ここの
水たまり たまり
流れの すべも めあてもなくて
ただ たまりつて
たまりつて ほかはない
どこにも ほかはない
やがて 水たまり
消え失せゆく
水たまり 消え失せゆく
わたたち 消え失せゆく
水たまり 消え失せゆく

わたしたちの深さ
それは泥の言葉
わたしたちの深さ
それは泥の言葉
泥のちぎり
泥のまどい

だが
わたしたちにも
いのちはないか
空に向かう
いのちはないか
あの水たまりの にごった水が
空をうつせうとする
ささやかな
けれどもいちぢくはないのか

うつつした空の
澄(あ)らうに 苦しむ
小(こ)さな ところ
うつつしたまに 苦しむ
高(たか)さうに 苦しむ
在(あ)る ところ
小(こ)さな ところ

空をうつつと風(か)ぐこともある
波一つなく混れなくて
岩と混れなくて
たけり狂うこともある

しかし 凡(すべ)ての川はみな
そなたをさして常に流れた
底に沈むべきものは沈め
空にかえすべきものは
空にかえした
人でさえ 行けなくなれば
そなたを さしてゆく
そなたの中の 一人の母をさしてゆく

そして そなたは
時経てから 赤ち 足りた死を
そつと 岸辺にうち上げる
みなさい 見なさい と云いたげに

5 水

ありとある 芥(あは)た
よこれ 疲れはてた水
受け容(い)れて
つねに 受け容れて
海の 不可思議

やすみない 汀(はら)さ
波の指 白い指 かりかえし
うま指 くりかえし
億の砂の 億の小石を
数えつづける
海の 不可思議

雨

雨のおとが きこえる
雨がふっていたのだ。

あのおとのように そつと世のために
たらいしていよう。

雨があがるように しずかに死んでゆこう。

男声合唱組曲『雨』より 5 終曲

八木重吉 作詩 多田武彦 作曲

会場の皆さんとご一緒に

1 乳母車

母よ —
淡くかなしきものふるなり
紫陽花(あじは)いろのものふるなり
はてしなき並樹のかげを
そそうとうと風のふくなり
時はたそがれ
母よ 私の乳母車(りぼ)を押せ
泣きぬれる夕陽(ゆづ)にむかって
凜々(りん)と私の乳母車を押せ

赤い纒(ま) ある天鷲絨(てんじゆ)の帽子
つめたき額(ひた)にかむらせよ
旅いそぐ鳥の列にも
季節は空を渡るなり

淡くかなしきものふる
紫陽花(あじは)いろのものふる道
母よ 私(わたし)は知(し)つてある
この道(みち)は遠(とほ)く遠(とほ)くはしてしない道

〔詩集：『測量船』より〕

くらはは 海(うみ)の月(つき)
ひとは 海(うみ)の星(ほし)
海(うみ)の馬(うま) 空(そら)にこがれ
あこや 光(ひかり)を抱(かか)っている

そして 深く暗(くろ)い 海(うみ)の底(そこ)では
下(した)から 上(うへ)へ 下(した)から 上(うへ)へ
まことと 下(した)から 上(うへ)へ
雪(ゆき)は 降り(ふ)りしきる

おお 海(うみ)よ
たえ 始(は)まりに 始(は)まりよ
あふれるに 始(は)まりよ
あふれるに 始(は)まりよ
終(は)るかに 始(は)まりよ
終(は)るかに 始(は)まりよ
憶(おぼ)えの 始(は)まりよ
そなたは 始(は)まりよ
おお 空(そら)へ
空(そら)の高(たか)みへ 始(は)まりよ

のぼれ のぼりゆけ
そなた 水(みづ)のこがれ
そなた 水(みづ)のいのちよ

たとえ 己(おれ)の重(おも)さに
逆(さか)らぬ いきれず
雲(くも)となり 始(は)まりよ
また 始(は)まりよ

のぼれ のぼりゆけ
みえない つばさ
いぢずな つばさ あるかぎり
のぼれ のぼりゆけ
おお

雨 [意訳の試み]

心に響く雨の音である
私を包むように雨が降っていたのだ

あの雨の音のように必要とされるものとして
私は働いていこうと思う

雨が上がれば 足跡すら残さないうちに去りたいものだ

〔意訳の試み B 1 伊東清邦〕

2 かやの木山の

作詩：北原白秋 作曲：山田耕筰

かやの木山の
かやの実(み)は
いつかこぼれて
ひろわられて

山家(やまが)のお婆(おば)さは
いろり端(は) (歌)
粗朶(ぞだ)たき 柴(しば)たき
燈(あかり)つけ

かやの実(み) かやの実(み)
それ爆(は)ぜた
今夜(こんや)も雨(あめ)だろ
もう寝(ね)よ

お猿(さる)が啼(な)くた
早(はや)よお眠(ね)

3 からたちの花

作詩：北原白秋 作曲：山田耕筰

からたちの 花が咲いたよ。
 白い 花が咲いたよ。
 からたちの とげはいたいよ。
 青い 針のとげだよ。
 からたちは 畑の垣根よ。
 いつもいっつも とほる道だよ。
 からたちも 秋はみのるよ。
 まるい まるい 金のたまだよ。
 からたちの そばで泣いたよ。
 みんなみんな やさしかったよ。
 からたちの 花が咲いたよ。
 白い 花が咲いたよ。

1 最上川舟唄

山形県民謡 清水 脩 作曲

エーエンヤエーエエンヤエー エーエンヤエー エート
 ヨイサノマカシヨ エンヤカラマカシヨ

1 酒田さ 行ぐはげ 達者(物)でろちや
 流行風邪(はやしめ)など ひがねよに
 2 酒田さ いままち 鳴いて通る鳥
 銭も 持たずに かおかおと

ヨイサノマカシヨ エンヤコラマカシヨ
 マカシヨ マカシヨ
 エンヤエーエエンヤエー エーエンヤエーエート
 ヨイサノマカシヨ エンヤコラマカシヨ

1 別れ 辛さよ 山瀬の風だ 俺を恨むな 風恨め
 2 ごけんにしゃくの ござほあげて くだす
 さかたの おおみなど

エンヤエーエーエー エンヤエーエート あの子のためだ
 なんぼとつても足(た)んと足んと エーエンヤエーエート
 ヨイサノマカシヨ エンヤカラマカシヨ
 ヨイサノマカシヨ エンヤカラマカシヨ
 エンヤコラ エンヤコラ エンヤコラ エンヤコラ マカシヨ

3 大島節

伊豆大島民謡 福永陽一郎 編曲

ハアアア
 わたしや大島 御神火育ちヨ
 胸に煙がヨ 絶えはせぬヨ
 ハアアア
 ツツジ椿は 御山を照らすヨ
 殿の御船はヨ 難照らすヨ

ハアアア
 茅ヶ崎沖まじや 見送りましようがヨ
 それから先おばヨ 神頼みヨ

4 この道

作詩：北原白秋 作曲：山田耕筰

この道はいつか来た道、
 ああ、さうだよ、
 あかしやの花が咲いてる。
 あの丘はいつか見た丘、
 ああ、さうだよ、
 ほら、白い時計臺(たい)だよ。
 この道はいつか来た道、
 ああ、さうだよ、
 お母さまと馬車で行ったよ。
 あの雲もいつか見た雲、
 ああ、さうだよ、
 山査子(さげし)の枝も垂れてる。

2 蕎麦太郎節

宮城県民謡 竹花秀昭 編曲

エンヤエー エー エンヤ
 エンヤオット エンヤオット エンヤオット
 松島の サーヨ 瑞巖寺(みずい)ほどの (ハツコリヤコリヤ)
 寺もないとーエー
 アレハエー エイトソリーヤ 大漁だーエー
 エンヤオット エンヤオット エンヤオット
 前は海 サーヨ 後は山で (ハツコリヤコリヤ)
 小松原とーエー
 アレハエー エイトソリーヤ 大漁だーエー

ハツヨイシヨ
 石巻 サーヨ その名も高い (ハツコリヤコリヤ)
 日和(ひり)山とーエー
 アレハエー エイトソリーヤ 大漁だーエー

エンヤエー エンヤエー エンヤエー エンヤエー
 西東(にしとう) サーヨ 松島遠島(とほ) (ハツコリヤコリヤ)
 目の下にとーエー
 アレハエー エイトソリーヤ 大漁だーエー

ほほえみ 谷川俊太郎 作詩 松下耕 作曲

ほほえむことができぬから 青空は雲を浮かべる
 ほほえむことができぬから 木は風にそよぐ

ほほえむことができぬから 犬は尾をふり
 — だが人は
 ほほえむことができないのに 時としてほほえみを忘れ
 ほほえむことができないから ほほえみて
 人を あざむく

[男声合唱とピアノのための『この星の上で』より 4 ほほえみ]

夜のうた

阪田寛夫 作詩 佐々木伸尚 作曲
福永陽一郎 編曲

暗い地球に あかりがともる
 光の輪のなかに ほほえみがある
 さびしいけれど ひどりぼっちじゃない夜
 おやすみ 今日の日 おやすみ 仲間

霧が川から 静かにのぼる
 おまえの窓の灯も やさしくるむ
 さびしいけれど ひどりぼっちじゃない夜
 おやすみ 今日の日 おやすみ 仲間

[1967年 全日本合唱連盟創立20周年記念 連盟歌として創る]

白い光の中に 山なみは萌えて
 遙かな空の果てまでも 君は飛び立つ
 限り無く青い空に 心ふり返ることもせず
 自由を駆ける鳥よ 希望の夢をたくして
 勇気を翼にこめて 夢をたくして
 このひろい大空に

懐かしい友の声 ふとよみがえり
 意味もないさかいたに 泣いたあとのとき
 心かよったうれしさに 抱きあつた日よ
 勇気なすぎたけれど 思いで強く抱いて
 このひろい大空に 希望の風にのり
 このひろい大空に 夢をたくして

いま 別れのとき
 飛び立とう 未来信じて
 弾む若い力信じて
 このひろい 大空に

いま 別れのとき
 飛び立とう 未来信じて
 弾む若い力信じて
 このひろい 大空に

暮れなずむ町の 光と影の中
 去りゆくあなただへ 贈る言葉
 悲しみこらえて 微笑むよ
 涙かれぬまじく 泣くがいい
 人は悲しみが 多いほど
 人には優しく できるほど
 さよならだけを 贈る言葉
 愛するあなただへ 贈る言葉

夕暮れの風に 途切れたけれど
 信じて聞かぬ 贈る言葉
 人を信じて 嘆くよりも
 求めないで 優しくがいい
 臆病者の言 傷つこうか
 はじめた愛した ありがとうから
 飾りもつげずに 贈る言葉

これから始まる 暮らしの中で
 だれかあなたを 愛するでしょう
 だれか私ほど ヤツはいい
 深く愛した影が あはれない
 遠ざかる影が 人混みに消えた
 もも届かない 贈る言葉

男声合唱組曲 月光とピエロ

作詩：堀口大聖 作曲：清水 脩

1 月夜

月の光の照る辻(つじ)に
ピエロさびしく立ちにけり。

ピエロの姿白ければ
月の光に濡(ぬ)れにけり。

あたりしみじみ見まはせど
コロンビイヌの影もなし。

あまりに事のかなしさに
ピエロは涙ながしけり。

2 月夜

泣き笑ひしてわがピエロ
秋じゃ！ 秋じゃ！ と歌ふなり。

Oの形の口をして
秋じゃ！ 秋じゃ！ と歌ふなり。

月のようなる白粉(おしろい)の
顔が涙を流すなり。

身すぎ世すぎの是非もなく
おどけたれどもわがピエロ

秋はしみじみ身に滲(しみ)みて
眞實(まこと)なみだを流すなり。

3 ピエロ

ピエロの白さ！
身のつらさ！

ピエロの顔は
眞白(ましろ)け！

白くあかるく
見ゆれども

ピエロの顔は
さびしかり！

ピエロは
月の光なり！

白くあかるく
見ゆれども

月の光は
さびしかり！

4 ピエロの嘆き

かなしからずや身はピエロ、
 月の孀(やせ)の父無児(てれこ)！
 月はみ空に身はここに、
 身すぎ世すぎの泣き笑ひ！

5 月光とピエロとピエレットの唐草模様

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
踊りけり、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット
歌ひけり、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。

踊りけり、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。
歌ひけり、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。

踊りけり、
歌ひけり、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。

月の光に照らされて
ピエロ、ピエレット。
ピエロ、ピエレット。
月の光に照らされて。

この道

この道はいつか来た道、
ああ、そうだよ、
あかしやの花が咲いてる。

あの丘はいつか見た丘、
ああ、そうだよ、
ほら、白い時計台だよ。

この道はいつか来た道、
ああ、そうだよ、
お母さまと馬車で行ったよ。

あの雲もいつか見た雲、
ああ、そうだよ、
山査子(さんざし)の枝も垂れてる。